

博物館だより

No.188



令和4年7月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー						
2022年 7月						
日	月	火	水	木	金	土
26	27	28	29	30	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

休館日 ※情報はR4.6.21現在

◆博物館NEWS

「文化のみやこづくり」記念プロジェクト

わたしの町の過去・現在・未来絵画コンクール 小学生歴史たんけん作文コンクール

作品募集!

博物館では京築地区に在住・通学する小中学生を対象に、ふるさとの歴史と文化ゆかりの絵画・作文作品を募集するコンクールを開催します。

これから迎える夏休みを利用して、自分の家族や地域・日本の歴史や文化にまつわる「みどころ」や「お気に入り」を、絵や文章で表現し合おう!というコンクールです。

募集作品のテーマや応募要領は次の通りです。皆さん奮って自慢の作品をお寄せ下さい!



◀来館者による投票の様子 (R3)
一次審査を通過した絵画作品は博物館ホールに展示して来館者による「いいね!」投票を行います。選ばれた作品はグランプリ作品として本紙等で紹介します

博物館での入賞作文展示の様子 (R3) ▶
例年50点前後の応募がある作文コンクール。歴史にまつわるさまざまなものごたを自分の思いでつづってみよう!
(写真はR3年度の入賞作品展示の様子)



★わたしの町の過去・現在・未来絵画コンクール(3部門)

三つの部門からお気に入りのテーマを選び、わたしの町の「過去・現在・未来の姿」について、あなたが「いいね!」と思っているお気に入りの文化遺産や眺め、想像を描いて下さい。

★歴史たんけん作文コンクール
皆さんが住む町や地域の歴史、おじいちゃん・おばあちゃんに聞いた昔の話、歴史の本を読んだ感想、旅行先で調べた史跡や先人のことなど「歴史」に関すること、思わず「アツくなった」ことを文章にして下さい。

◆応募要領(概要のみ)

- ・しめ切り: 9月16日(金)
 - ・応募方法: 博物館へ郵送か持参
 - ・その他: 入賞者へ賞品贈呈
- これ以外の詳しい応募要領については博物館 ☎33-4666 へお問合せ下さい。

なお、コンクールは新型コロナウイルスの感染拡大に伴う情勢変化があった場合、中止を含めて内容変更する場合がございますので、ご承知お下さるようお願いいたします。

◆講座・教室・催し物ガイド 7月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】
7月2日(土) 9時30分
 - 【古文書講座】
7月9日(土) 10時
 - 【古典かな講座】
7月16日(土) 9時30分
 - 【みやこ学講座】
7月23日(土) 10時
- ※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途通知します。

文化遺産ボランティア (豊み隊!) 活動案内

7月から実稼働に入り、ワーク編の実践(永沼家住宅周辺除草作業)を以下の要領で行います。調整可能な方は、ふるってご参加下さい。

- ・日時: 7月24日(日) 8時
- ・場所: 永沼家住宅(犀川帆柱)
- ・備考: ①現地集合・解散です。
- ②荒天時中止(前夜までに電話等で連絡します)。
- ③登録会員は別途ご案内します。

令和4年度夏休み子ども体験教室 「昆虫博士のお話&工作会」のお知らせ

博物館では「夏休みは色んな学びにチャレンジ!」する体験教室を開催しています。今年は昆虫をテーマに標本観察&ミニ工作教室を開催します。ふるってご参加下さい!

日時 8月21日(日)

*受付 9時30分

*教室 10時~11時30分(予定)

場所 博物館研修室

内容 ①講話&ミニフラット制作
②講師 松田勝弘さん

参加費 採集歴60年超の講師による
標本解説と面白昆虫話など

対象者 一人につき2000円

定員 先着25名(保護者含む)

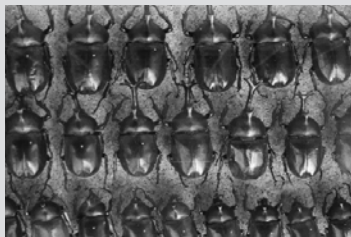
注意事項

※申込は7月9日(土)10時から電話または窓口にて受け付けます。

※1~3年生は保護者の同伴(原則1名)が必要

※託児対応はしていません。

※新型コロナウイルスの感染拡大に伴う情勢変化があった場合、中止を含めて内容変更する場合があります。



▲お話&工作会の会場に展示予定の昆虫標本(部分/左:モルフォ蝶[パルー] 右:カトムシ[八景山])
当日の会場には講師の松田さんが永年にわたって採集した国内外の貴重な昆虫標本を展示します
身近な昆虫から図鑑でしかお目にかかれない海外の希少種まで「見るだけで楽しい!」会にしたい予定です

夏休みの思い出づくりはいかがですか?お申込みお待ちしております!!



みやこの歴史発見伝 149
 明治の二大文豪を支えた
 みやこの町の偉人 ①

森鷗外の没後100年

本年は「森鷗外」の生誕160年（1862年生まれ）の節目の年です。また7月で没後100年（1922年7月9日没）を迎えます。愛知県犬山市にある「明治村」には、かつて東京の文京区千駄木町にあった「夏目漱石」の住宅が移築されています。明治36年にロンドンから帰国後、漱石はこの家に住み、名作「吾輩は猫である」もこの一室で執筆したと伝えられています。実はこの邸宅、漱石が居住する前の家主が森鷗外であったことから、近代日本を代表する二人の文豪ゆかりの住宅として注目されています。



吉田増蔵(1866~1941)

この「明治の二大文豪」にそれぞれ仕えた人物は、共にみやこの町出身です。今回から、森鷗外に仕え、志半ばで亡くなった師の思いを託され、誰も達成

できなかった仕事をやり遂げた人物や、夏目漱石の門下で、漱石の作品をまとめた全集の編纂に携わった人物など、尊敬する師の活躍を陰で支えた二人のみやこの町出身の人物をご紹介します。

「元号」に人生をかけた森鷗外

小説家として有名な森鷗外は、陸軍軍医や官僚、国立博物館総長など様々な役職に就いた人物としても知られています。特に晩年から死の直前まで没頭した仕事で、「元号」の考案作業でした。鷗外はかねてより「明治は中国、大正はベトナムで使用された年号である」と指摘し、「大正」に次ぐ元号として、これまで国内外で使用例がない「完璧な元号」を考案するため、生涯をかけた仕事として取り組みます。そして「大化」から「明治」まで約1250年の間に使用された240あまりの元号の考証をまとめるため『元号考』の作成に着手します。これは元号考案の際、重複を避けるための重要な「データベース」となるものですが、中国、朝鮮半島、ベトナムなどで使用された年号やその考証について膨大な量の書物を対象に調査・研究する作業は想像をはるかに超えた困難なものでした。誰も成し遂げていない「完璧な元号」考案に不可欠なこの作業

に鷗外と一緒に取り組んだのが、みやこの町勝山上田出身の吉田増蔵です。漢学者として優れた吉田増蔵を自らの「一大プロジェクト」の助手として抜擢した鷗外ですが、その背景には彼の類まれな漢字の才能もさることながら、鷗外が小倉滞在中、軍事演習で仲哀隧道（みやこの町勝山松田・国登録文化財）を通過した際に句を詠んだ事が伝えられたなど、この地域との縁も関係したとみられています。しかしこの作業の最中に鷗外の体を病魔が蝕んでゆき、大正11年（1922）6月15日以降、ついに鷗外は出勤できない事態に陥ります。軍医であった鷗外は、自らの病状を見極めた上で、この『元号考』について全ての編集作業を吉田増蔵に託すことを決めます。また病状悪化を見据えて「日記の代筆」も彼に依頼しており、6月30日以降の彼の日記は増蔵の代筆によるものです。鷗外は愛蔵していた数千巻にも及ぶ中国の書籍について家族に「余が死したらば、之を吉田増蔵君に贈るべし。吉田君の外、善く之を用ふるものなし」と遺言に残しており、森鷗外が、増蔵の漢学の才能の高さを認め、いかに信頼していたのかを物語るエピソードとして伝えられています。その後、増蔵は『元号考』を完成させ、これをもとに70の

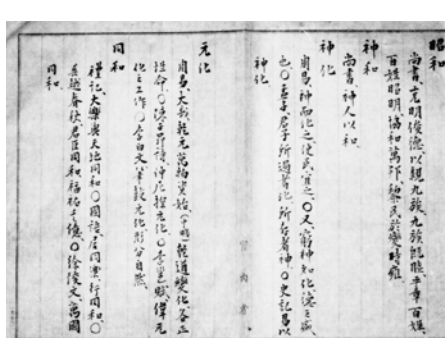
草案を作成。最終的に選考された10案の中から、「大正」に次ぐ元号として「昭和」が決定します。また、上皇陛下の称号・名前「継宮明仁」も吉田増蔵によって考案されました。

世界最長の元号「昭和」

現在、日本は世界で唯一の「元号使用国」です。また、「昭和」は「日本で最も長く続いた元号」であり、さらに中国やベトナムなどの外国の使用例も含めて「世界最長の元号」に位置付けられています。特に「昭」の漢字が広く普及したのは元号「昭和」に用いられたことに拠るところが大きく、この当時、一般的にはほとんど用いられていなかった漢字のひとつでした。「昭」の漢字を元号に用いたのは吉田増蔵が高度な漢学の知識を駆使し、膨大な数の漢字の中から国内外

で使用された年号やその考証について膨大な量の書物を対象に調査・研究する作業は想像をはるかに超えた困難なものでした。誰も成し遂げていない「完璧な元号」考案に不可欠なこの作業

に鷗外と一緒に取り組んだのが、みやこの町勝山上田出身の吉田増蔵です。漢学者として優れた吉田増蔵を自らの「一大プロジェクト」の助手として抜擢した鷗外ですが、その背景には彼の類まれな漢字の才能もさることながら、鷗外が小倉滞在中、軍事演習で仲哀隧道（みやこの町勝山松田・国登録文化財）を通過した際に句を詠んだ事が伝えられたなど、この地域との縁も関係したとみられています。しかしこの作業の最中に鷗外の体を病魔が蝕んでゆき、大正11年（1922）6月15日以降、ついに鷗外は出勤できない事態に陥ります。軍医であった鷗外は、自らの病状を見極めた上で、この『元号考』について全ての編集作業を吉田増蔵に託すことを決めます。また病状悪化を見据えて「日記の代筆」も彼に依頼しており、6月30日以降の彼の日記は増蔵の代筆によるものです。鷗外は愛蔵していた数千巻にも及ぶ中国の書籍について家族に「余が死したらば、之を吉田増蔵君に贈るべし。吉田君の外、善く之を用ふるものなし」と遺言に残しており、森鷗外が、増蔵の漢学の才能の高さを認め、いかに信頼していたのかを物語るエピソードとして伝えられています。その後、増蔵は『元号考』を完成させ、これをもとに70の



「大正に次ぐ元号」の最終案

で使用事例がないことを確認した上で「選び抜いた一字」であったことがその理由とみられています。元号「昭和」の発表直後、報道関係者は一刻を争うように自身の勤務先へ電話で新元号を伝えましたが、「昭」の漢字がうまく伝わらなかったというエピソードが残されています。「平成」の元号発表からその舞台がテレビ中継などの動画に変わりました。これに伴い現在、「視覚・聴覚」で瞬時に元号が認識できるように墨で書かれた元号を読み上げる方法が用いられています。この方法が採用された要因のひとつとして、「昭和」発表時の出来事が関係しているともいわれています。また鷗外の意志を引継ぎ、吉田増蔵が完成させた『元号考』は鷗外と増蔵が取り組んだ一つの集大成であり、元号「令和」の考案作業でも用いられたと推察できることから、今後の元号考案作業でも欠かすことのできない重要な資料に位置付けられています。軍医、小説家だけではなく、漢学者としても「超一流」であった森鷗外にその能力の高さを認められ、自身が最もやり遂げたかった「完璧な元号の考案」という作業を託され、それを見事に成功させた吉田増蔵という人物の功績を後世まで広く伝えてゆきたいものです。

（井上信隆）